

令和 6 年 5 月 5 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01257

研究課題名（和文）言語喪失の動態の研究：沖永良部語若年層話者における言語消滅メカニズムの解明

研究課題名（英文）Study on dynamics and a mechanism of language declination among young generations in Okinoerabu

研究代表者

中山 俊秀（Nakayama, Toshihide）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：70334448

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,500,000円

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトでは、沖永良部島の伝統的な言語・文化に焦点を当て、社会の中で急速に失われていっている問題の要因とその構造を明らかにすることをめざした。特に、言語を流暢に使う年代のすぐ下の若年層の言語使用に着目し、言語構造に関する知識、言語使用パターンと言語態度に関する調査・研究を行った。本研究を通じて、地域内での言語の使用状況とその変化、言語意識の違いを明らかにすることができた。これらの成果は学術論文にまとめられ、さらに地域コミュニティとのワークショップやメディアを通じて一般に公開された。言語再活性化に向けた具体的な提案も行われ、地域社会の言語維持への取り組みを促進するための基盤が築かれた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、沖永良部島における伝統言語の継承・保持の状況について、特に、言語を流暢に使う年代のすぐ下の若年層に焦点を当て、表向きの言語知識や運用能力だけでなく、言語を使う場面や、言語や言語を使うことに対する意識なども合わせて多面的に調査・分析した。今回の研究対象とした若年層話者たちは、言語知識・能力の面では十分に伝統言語を使うことができるが、伝統言語を使うことが自然であると感じられる社会的環境の縮小、伝統言語を使うことに対する苦手意識やイメージなどが言語の使用・不使用に大きく関与している様子を見てとることができた。この研究成果は今後の伝統言語再活性化活動設計に有意義な貢献をすると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This project focused on the traditional language and culture of Okinoerabu Island, aiming to uncover the factors and structures behind its rapid loss within society. Specifically, the research targeted the language use of the younger generation immediately following the fluent speakers, studying their knowledge of language structure, usage patterns, and attitudes. The study revealed variations in language use and shifts in linguistic consciousness within the community. These findings have been compiled into academic papers and disseminated through workshops and media engagements with the local community. Concrete suggestions for language revitalization were also made, laying a foundation for efforts to sustain the local language.

研究分野：言語学、言語ドキュメンテーション

キーワード：危機言語 言語再活性化 社会言語学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、世界各地で急速に進行する伝統言語の消滅という深刻な社会問題の構造について、言語に関する知識の問題だけでなく、伝統言語使用を取り巻く社会環境や伝統言語に対する心的態度なども含めた多面的な観点から調査、分析することを目的として開始された。

言語の多様性は人類の貴重な文化遺産であり、その保全は国際的に喫緊の課題とされている。しかし、グローバル化や都市化、社会経済構造の変容などに伴い、言語の消滅は地球規模で広がりを見せており、その原因や影響、対策について多角的な研究が求められていた。これまでの研究では、言語シフトのマクロな社会的要因や、個別言語の記述的研究に重点が置かれてきた。しかし、消滅の危機に瀕した言語コミュニティの内部で何が起きているのか、特に若年層話者の言語能力や言語使用、言語意識がどのように変容しているのかについては、十分に解明されていなかった。言語の消滅を動的なプロセスとして理解し、話者個人と社会の相互作用の中で捉えることが必要とされていた。また、従来の研究では、言語の記録と保存に主眼が置かれ、話者コミュニティの言語再活性化への実践的な貢献は限定的であった。危機言語の研究者には、言語の多様性を維持し、コミュニティの言語継承を支援するための具体的な方策を探ることが期待されていた。

以上のような背景から、本研究では、沖永良部島の危機言語コミュニティを対象とし、消滅の危機に瀕した言語コミュニティにおいて、若年層話者の言語能力や言語使用、言語意識がどのように変容しているのかについて、フィールド言語学、社会言語学、言語人類学の手法を用いて、実証的に解明し、言語維持・再活性化のための方策を探ることを目的とした。

2. 研究の目的

本研究課題の当初の目的は、沖永良部島の消滅危機言語コミュニティを対象として、以下の3点を明らかにすることであった。

(1) 伝統言語を失いつつある若年層話者の文法知識と運用能力、言語選択・使用のパターンを包括的に調査・記述する。

危機言語コミュニティ内部の言語状況を把握するためには、話者の言語能力や言語使用の実態を詳細に記録し、分析することが不可欠である。特に、伝統言語の衰退が著しい若年層に焦点を当て、彼らの文法知識や運用能力がどのように変容しているのか、日常生活の中でどのように言語を選択し、使用しているのかを明らかにする。これにより、言語シフトの進行状況や言語喪失のプロセスを動的に捉えることができると考えた。

(2) 若年層話者の言語能力・使用実態と、言語に対する意識・心的態度との関連性を多角的に分析する。

言語の消滅は、単に話者の言語能力の問題ではなく、言語を取り巻く社会的・心理的要因が複雑に絡み合った現象である。本研究では、若年層話者の言語使用や言語能力と、彼らの言語に対する意識や態度がどのように関連しているのかを探る。伝統言語に対するアイデンティティや価値観、ステレオタイプなどが、言語の維持や乗り換えにどのような影響を与えているのか明らかにすることをめざした。

(3) 上記の知見を統合し、言語消滅のプロセスとメカニズムを動的なシステムとして理解するとともに、言語維持・再活性化のための効果的な介入方法を探る。

話者の言語能力、言語使用、言語意識に関する実証的知見を総合し、言語シフトや言語喪失のメカニズムを理論的に考察する。個人の心的過程と、社会的・文化的な文脈の相互作用の中で、言語の消滅がどのように進行するのかを動的なシステムとしてモデル化する。その上で、言語の維持や再活性化のためには、どのようなアプローチが有効なのかを検討し、コミュニティにおける活動の設計に有用な知見を提供することを目標とした。

3. 研究の方法

本研究課題では、フィールド言語学、社会言語学、言語人類学の手法を組み合わせ、以下のような方法で研究を遂行した。

(1) 現地コミュニティにおけるフィールドワーク

沖永良部島の言語コミュニティにおける参与観察やインタビュー、アンケート調査などを通じて、データを収集した。若年層話者を中心に、日常生活の様々な場面で、自然な言語使用を観察・記録し、言語選択や言語行動の特徴を捉えることをめざした。また、話者に対して、言語に関する意識や態度、言語使用の背景などについて、詳細なインタビューを行った。

(2) 言語データの分析

収集した言語データを、文法構造、語彙、談話・会話構造などの観点から分析した。伝統言語と日本語の接触による言語変化や、世代間の言語能力の差異に注目し、言語の衰退過程で生じる変容のパターンを明らかにした。また、談話分析の手法を用いて、コミュニケーション場面における言語選択や言語使用の特徴を記述した。

(3) 社会言語学的分析

言語使用と社会的変数（年齢、性別、職業、教育歴など）との関連性を統計的に分析し、言語選択・使用のパターンを社会的文脈の中で理解した。世代間、男女間、社会階層間での言語使用の差異や、ドメイン（家庭、学校、職場など）による言語選択の違いを明らかにした。また、インタビュー調査により、話者のつながりと言語使用の関係を探った。

(4) 言語意識の分析

アンケートやインタビューのデータを質的・量的に分析し、話者の言語に対する意識や態度、価値観を多面的に捉えた。伝統言語と日本語に対するイメージや評価、言語とアイデンティティの関わり、言語使用に対する規範意識などを明らかにした。また、民族誌的な記述を通して、話者の主観的な言語体験を掘り下げ、言語の社会的・文化的な意味を考察した。

(5) 理論的考察

以上の実証的知見を、言語接触、言語変容、言語シフトなどに関する理論的枠組みの中で考察し、言語消滅のメカニズムを動的システムとして分析し、言語シフトや言語喪失の一般モデルの構築を試みた。

4. 研究成果

本研究課題の成果は、大きく以下の4点にまとめられる。

(1) 沖永良部島の若年層話者の言語能力と言語使用の実態を、文法、語彙、談話・会話の各層において分析した。伝統言語の生成能力を包括的に測るためのデータは十分に収集できなかったが、理解能力については、高齢層の流暢な話者と同等の理解力があることがわかった。また、場面や相手によって、伝統言語と日本語を使い分ける能力も保持されていた。

(2) 若年層話者の言語選択・使用のパターンが、年齢、職業、教育歴などの社会的変数と関連しているようであった。また、家庭、学校、職場などの社会的場面ごとに、言語使用の特徴と規範意識の違いが明らかになった。役場の職員など、伝統言語の話者に日常的に対している人は若年層であっても伝統言語を話すことができ、伝統言語を学習する社会的文脈が存在することが確認できた。こうした事例は、伝統言語使用が期待される社会的文脈を作り出すことが、言語再活性化の有力な手法の一つとなりうることを示している。

(3) 若年層話者の言語意識や言語に対する態度が、言語能力や言語使用と複雑に相互作用していることが見てとれた。伝統言語に対するアイデンティティの希薄化や実用的価値の低下が、言語シフトを加速させている可能性が示唆された。一方で、伝統文化の継承や地域のシンボルとして、伝統言語の重要性を認識する話者も一定数存在した。

(4) 以上の知見を統合し、言語の消滅を、話者個人の心的過程と社会的・文化的文脈が複雑に絡み合う動的なシステムとして理論化した。言語シフトは、マクロな社会構造の変容とミクロな話者の選択が相互に影響し合う中で進行する。その過程で、言語の構造的な単純化と、社会的な評価の低下が悪循環を生み、言語の衰退を加速させていくことが示された。また、言語の消滅は、話者のアイデンティティや社会関係の変容とも密接に関わっており、言語だけでなく、文化や共同体の存続をも脅かしかねないことが指摘された。

その上で、言語維持・再活性化のためには、話者の言語意識や社会的ネットワークに働きかける多層的なアプローチが必要であると考えられる。具体的には、(1)伝統言語の実用的な価値を高めるための取り組み（教育やメディアでの活用など）、(2)伝統言語に対する肯定的なイメージを醸成するための言説の構築、(3)伝統言語を中心とするコミュニティの社会関係資本の強化（世代間交流の促進など）などである。

本研究の成果は、言語の消滅と再活性化に関する理論的理解を深化させるとともに、言語多様性の保全に向けた実践的示唆を提供するものであり、国内外の危機言語研究に貢献するものと期待される。特に、従来の研究では十分に検討されてこなかった、若年層話者の言語能力や言語意識の変容を、動的なシステムとして記述・分析した点に新規性がある。また、言語人類学の視点を導入することで、言語の消滅を、単なる言語の問題ではなく、コミュニティと文化の存続

に関わる複合的な現象として捉え直した点も、重要な貢献と言える。

今後は、本研究で得られた知見や分析枠組みを、他の言語コミュニティに応用し、より一般性の高い言語消滅のモデルを構築することが課題である。また、理論的な研究と並行して、研究成果を現地コミュニティに積極的に還元し、話者主体の言語再活性化の取り組みを支援していくことも重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 横山晶子, 富岡裕, 中山俊秀	4. 巻 47
2. 論文標題 危機言語コミュニティにおける、家庭内での言語選択の変遷 北琉球沖永良部島を事例に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 琉球の方言	6. 最初と最後の頁 71-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山晶子,	4. 巻 9
2. 論文標題 沖永良部島民の言語意識資料 アンケート調査を元に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 161-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Horiuchi Fumino; Nakayama Toshihide	4. 巻 39(1)
2. 論文標題 Commas as a constructional resource: the use of a comma in a formulaic expression in Japanese social media texts	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 145-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/jjl-2023-2010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川晶一; 中山俊秀他	4. 巻 -
2. 論文標題 VRを活用するメタバースコミュニティの理解にむけて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 第28回日本バーチャルリアリティ学会大会論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中山俊秀	4. 巻 -
2. 論文標題 適応することば：内的要因による言語変化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 菊澤律子、吉岡乾（編）『しゃべるヒト：ことばの不思議を科学する』	6. 最初と最後の頁 240-247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川芳樹, 中山俊秀	4. 巻 -
2. 論文標題 変化・変異・進化の事実に向き合う種々の言語理論 必要なのは対立か, 対話か, 連携か	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小川芳樹, 中山俊秀編『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論3』	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山俊秀	4. 巻 -
2. 論文標題 言語の多様性が教えてくれること：言語システムの動的性質と文脈依存的性質	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本音響学会第148回研究発表会論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山晶子	4. 巻 4
2. 論文標題 沖永良部島和泊町国頭方言の存在動詞「ある」「ない」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 シマジマのしまくとぅば4 令和4年度 消滅の危機にある方言の記録作成 および啓発事業	6. 最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田真寛、横山晶子	4. 巻 -
2. 論文標題 戦うことば：消滅危機言語保存の研究と実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Toi Tou Toi	6. 最初と最後の頁 70-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/toitoutoi_00_6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Akiko Yokoyama	4. 巻 37(2)
2. 論文標題 The interrogative intonation in the Kunigami dialect of Okinoerabu, Ryukyu	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 259-274
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/jjl-2021-2043	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山晶子	4. 巻 -
2. 論文標題 鹿児島県沖永良部島国頭	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本の消滅危機言語・方言の文法記述	6. 最初と最後の頁 363-436
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川芳樹, 中山俊秀	4. 巻 -
2. 論文標題 変化・変異・進化の事実に向き合う種々の言語理論 必要なのは対立か, 対話か, 連携か	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小川芳樹, 中山俊秀編『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論3』	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山俊秀	4. 巻 -
2. 論文標題 言語の多様性が教えてくれること：言語システムの動的性質と文脈依存的性質	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本音響学会第148回研究発表会論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山晶子	4. 巻 4
2. 論文標題 沖永良部島和泊町国頭方言の存在動詞「ある」「ない」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 シマジマのしまくとぅば4 令和4年度 消滅の危機にある方言の記録作成 および啓発事業	6. 最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横山晶子	4. 巻 9
2. 論文標題 沖永良部島民の言語意識資料 アンケート調査を元に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山晶子	4. 巻 -
2. 論文標題 北琉球沖永良部国頭方言の焦点助詞と「係り結び」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日琉諸語における情報構造と文法現象	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 9件）

1. 発表者名 Tomoyuki Sao, Lili Sao, Yukie Matsumura, Yutaka Tomioka, Toshihide Nakayama
2. 発表標題 The Next Cultural Guardians: Youth-Led Action in Preserving and Promoting Indigenous Languages, Practices and Traditions in Asia
3. 学会等名 7th International Conference on Language and Education: Multilingual Education For Transformative Education Systems And Resilient Futures (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 横山晶子, Suraratdecha Sumittra, 富岡裕
2. 発表標題 ヘリテージキャンプ：沖永良部島での実践報告
3. 学会等名 琉球継承言語研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Toshihide Nakayama
2. 発表標題 How far can we go with the clause?
3. 学会等名 18th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Fumino Horiuchi, Toshihide Nakayama
2. 発表標題 Mobilizing syntactic rules for discourse organization: A case study of utterances starting with a dependent element in Japanese
3. 学会等名 18th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Toshihide Nakayama
2. 発表標題 What 'grammatically deviant' patterns can tell us about grammar
3. 学会等名 International Symposium on Rethinking Grammar (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 文法体系の拡張：逸脱構文の発達事例から考える
3. 学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2022年度第2回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 言語の多様性が教えてくれること：言語システムの動的性質と文脈依存的性質
3. 学会等名 日本音響学会第148回研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山晶子
2. 発表標題 しまむに（北琉球沖永良部語）の言語復興活動
3. 学会等名 日本島嶼学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山晶子、山田真寛
2. 発表標題 市民科学者の育成
3. 学会等名 琉球諸語継承研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 横山晶子
2. 発表標題 Numeral Systems in Japonic
3. 学会等名 Studies in Asian and African Geolinguistics
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 堀内ふみ野, 中山俊秀
2. 発表標題 ネタさえあれば、だけどね：読点を含めた定型表現研究の可能性
3. 学会等名 International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀内ふみ野, 中山俊秀
2. 発表標題 ただの点、だけどね：構文構成素としての読点
3. 学会等名 日本言語学会第162回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 用法基盤アプローチが関心を向ける「語」のリアリティ
3. 学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2021年度第2回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Toshihide Nakayama, Fumiko Horiuchi
2. 発表標題 'Structural incompleteness' as a communicative strategy: What motivates utterances starting in the middle?
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association of Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 『周辺の』文法パターンは文法研究をどのように広げてくれるのか
3. 学会等名 日本英語学会第39回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 扱いにくいデータが教えてくれること：逸脱的構文が明らかにする文法システムの文脈依存性
3. 学会等名 AA研フォーラム：『アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築』
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kohei Nakazawa, Akiko Yokoyama
2. 発表標題 Crop terms in Japanese
3. 学会等名 Studies in Asian and African Geolinguistics (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kohei Nakazawa, Akiko Yokoyama
2. 発表標題 Animal vocabulary in Japanese
3. 学会等名 Studies in Asian and African Geolinguistics (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 文法体系の拡張：逸脱構文の発達事例から考える
3. 学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2022年度第2回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 言語の多様性が教えてくれること：言語システムの動的性質と文脈依存的性質
3. 学会等名 日本音響学会第148回研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山晶子
2. 発表標題 しまむに(北琉球沖永良部語)の言語復興活動
3. 学会等名 日本島嶼学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山晶子、山田真寛
2. 発表標題 市民科学者の育成
3. 学会等名 琉球諸語継承研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kohei Nakazawa, Akiko Yokoyama
2. 発表標題 Numeral Systems in Japonic
3. 学会等名 Studies in Asian and African Geolinguistics (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 田中茉央、松村雪枝、横山晶子、Hara Alina	4. 発行年 2023年
2. 出版社 言語復興の港	5. 総ページ数 -
3. 書名 きばらぬ むにくとぅ(洋服のおしゃべり)	

1. 著者名 小島光貴、松村雪枝、横山晶子、Hara Alina	4. 発行年 2023年
2. 出版社 言語復興の港	5. 総ページ数 -
3. 書名 はちに ういてやぬ ぶっそーげ(はち植えのハイビスカス)	

1. 著者名 小川芳樹, 中山俊秀	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 445
3. 書名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論3	

1. 著者名 横山晶子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 0から学べるしまむに読本ー琉球沖永良部島のことばー	

1. 著者名 小川芳樹, 中山俊秀	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 445
3. 書名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論3	

1. 著者名 横山晶子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 160
3. 書名 0から学べる島むに読本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	横山 晶子 (Yokoyama Akiko) (40815312)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・特別研究員 (RPD) (12603)	
研究分担者	富岡 裕 (Tomioka Yutaka) (90816505)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・特別研究員 (PD) (12603)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------